

教育ICTを用いた授業づくり

—学力テストの課題をデジタルの視点から再構成した実践事例—

村 橋 直 樹 (文教大学教育研究所客員研究員)

今 田 晃 一 (文教大学教育学部)

Creation of Classes Using Educational ICT Tools -Practice Cases of Restructuring of Issues on Achievement Tests from Digital Perspective-

MURAHASHI NAOKI, IMADA KOICHI

(Guest Researcher of Institute of Education, Bunkyo University)
(Faculty of Education, Bunkyo University)

要 旨

学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てるために行われているのが「全国学力・学習状況調査」であり、その関心は年々高まっている。年度、校種、教科を超えて過去出題された学力テストの問題を検討すると、教育ICTを活用して取り組むことでより有効な学習活動を展開することができる出題事例が多く見られる。そこで本実践では、学力テストで示された課題を朝日新聞が提供するデジタルコンテンツを用いて授業を行い、教育活動におけるデジタルの可能性を検討した。

1. はじめに

全国学力・学習状況調査（以下「学力テスト」と略す）は、文部科学省が求める学力のメッセージであり、これから子どもたちに、必要な学力とは何かを考える貴重な題材であると捉える。

この学力テストがOECD（国際経済協力開発機構）のPISA（国際学力学習到達度調査、以下「PISA」と略す）の影響を受けていることは、問題の類似性からも明らかである。この調査においてわが国は2003年、2006年と連続して多くの分野で順位を下げた。これがPISAショックと呼ばれ、とりわけ2002年に実施された指導要領の改訂、いわゆる「ゆとり教育」がその原因ではないかと多くの批判を受けることになった。

これによって小学校6年生、中学校3年生を対象に国語、算数・数学について「知識

に関する問題のみならず「活用」に関する問題についても調査を実施することとなった¹⁾。全国学力・学習状況調査（学力テスト）は、調査結果の公表を巡ってメディアが頻繁に取り上げるなど国民全体の関心が高いことがうかがえる²⁾。

しかし、文部科学省の調査目的は、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育政策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況等に役立てることや、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立することである。

ここで調査する問題は、知識に関するA問題と、活用に関するB問題である。A問題とは、身につけていなければ後の学年等の学習

内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能を問う問題である。一方B問題とは、知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力を問う問題である³⁾。

またB問題は、PISA調査の調査内容と趣旨が一致する。PISA調査の内容は、知識や技能を、実生活の様々な場面でどれだけ活用できるかを問う問題である。児童生徒が習得した知識や技能を活用する力を問うB問題やPISA調査は、ICTを活用して学び合い高め合う「協働学習」の理念に適合する。PISA調査の各分野の定義より、「読解力」を高めるのに特にICTを活用した協働学習が有効であると考えた。

読解力の定義の中に「自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加する」とあり、21世紀を生き抜く力を育成するためには、協働的な学習活動を通じて効果的に育成することが求められている⁴⁾。ICTを活用することは、情報活用能力を育むことになり、タブレット型情報端末を用いるグループ学習の実現によって、お互いに影響を与えながら高まる、相互啓発をめざした学習活動にもつながる⁵⁾。

平成25年度実施の全国学力学習状況調査の国語B問題に、グループで協力して打ち上げ花火のリーフレットを作る問題がある。この問題の正答率が17.9%と低く、目的や意図に応じて該当する資料に着目した上で、必要となる複数の内容を関係付けることが課題として示されている⁶⁾。

その課題を克服するひとつの試みとして、朝日新聞のデジタルコンテンツである「朝日新聞for school」を用いて、小学校4年生の国語の学習「アップとルーズで伝えて」においてICTを活用した協働学習に取り組み、学力テストの課題を検討した。

2. OECDのPISA調査の結果より

PISA調査は、多くの国で義務教育終了段階にある15歳児を対象に、将来生活していく上で必要とされる知識や技能をどの程度身につけているかを検証するものである。したがって、PISA調査は、学校の教科で扱われているようなある一定範囲の知識の習得を越えた部分まで評価しようとするものであり、生徒がそれぞれ持っている知識や経験を元に自らの生活に関係する課題を積極的に考え、知識や技能を活用する能力があるかどうかを見るものである⁷⁾。

PISA調査は、特定のカリキュラムの内容をどの程度習熟しているかを調べるのが主目的ではなく、主に数学的リテラシー・読解力・科学的リテラシーに注目する。

数学的リテラシーは、「様々な文脈の中で安定化し、数学を適用し、解釈する個人の能力であり、数学的に推論し、数学的な概念・手順・事実・ツールを使って事象を記述し、説明し、予測する力を含む。これは、個人が世界において数学が晴らす役割を認識し、建設的で積極的、思慮深い市民に必要な確固たる基盤に基づく判断と決定を下す助けとなるもの」と定義されている⁸⁾。

読解力は、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考し、これに取り組む能力」と定義されている⁹⁾。

科学的リテラシーは、「疑問を認識し、新しい知識を獲得し、科学的な事象を説明し、科学が関連する諸問題について証拠に基づいた結論を導き出すための科学的知識とその活用」、「科学の特徴的な諸側面を人間の知識と探求の一形態として理解すること」「科学とテクノロジーが我々の物質的、知的、文化的環境をいかに形作っているかを認識すること」「思慮深い一市民として、科学的な考えを持ち、科学が関連する諸問題に、自ら進んで関

わること」と定義されている¹⁰⁾。

先に挙げた3つの能力のうち、今回の実践では「読解力」に焦点を当てた。PISA調査の読解力とは、将来それぞれのコミュニティに積極的に参加することを期待されている生徒たちの手段あるいは道具として捉えられている。

表1 PISA調査の順位の変移

	2006年	2009年	2012年
数学的リテラシー	10位	9位	7位
読解力	15	8位	4位
科学的リテラシー	6位	5位	4位

表1の示すように2012年度の結果より、3つの能力ともに順位が改善している。また、2012年調査では、日本が「問題解決能力」に3位の好成績を収めたのは、活用力・応用力を重視するPISAを意識した学力向上策が実を結んだ結果であるといわれている¹¹⁾。

2009年度の読解力の調査問題に「芝居は最高に関する問題」がある(図1)。芝居を始めるときに主な登場人物をどのように紹介させればいいのかをグループで討論しているのをもとにした問題である。記述、選択式を含めてこの問題の項目は4つある。その中で、問3はグループで討論している内容や登場人物の置かれている状況を理解しないと解くことができない問題になっている。

芝居は最高に関する問3

ある読者が言いました。「城にまねかれたことについて、三人の中では、たぶんアダムが一番わくわくしていると思う。」

このような意見を言うとしたら、どんな理由をあげたらよいでしょうか。文章の内容にもとづいて、理由を書いてください。

図1 OECD PISA2009の調査問題から

グループで討論して決定していく流れを理

解する能力は、学校での協働学習の経験が生かされる問題であるといえる。協働学習では小グループでの話し合い活動を通してICTを介在し、学び合い高め合いの相互啓発を行うことができる。つまり、OECDのPISA調査の設問にも協働学習を経験していると解くことができる問題である。

3. 2013年度の学力テストの結果より

PISA調査2009年度では、読解力の問題の「芝居は最高」はグループで討論している場面が問題文であった。この問題と同じように、グループで討論している問題が2013年度実施の全国学力調査に出題された。

2013年度実施の学力テストの国語科の全体的な状況として、目的や意図に応じ、必要な内容を適切に引用したり複数の内容を関係づけたりしながら自分の考えを書くことについて課題があった。

2013年実施の全国学力調査、小学校6年生国語B問題 2 目的や意図に応じてリーフレットを編集する<打ち上げ花火の伝統>がある。この出題の趣旨は、「目的や意図に応じ、必要な内容を書き加えたり、引用したり、複数の内容を関係付けたりしながら、リーフレットを編集することができるかどうかをみる」ことである。この問題では、日本の伝統と文化として打ち上げ花火を取り上げ、各自が調べたことをグループでリーフレットにまとめて書く場面が設定されている。「打ち上げ花火の伝統」をテーマとし、その歴史や花火の種類、花火師の苦労や工夫を取り上げている。これらの内容を含んだ下書きについて編集会議の意見を受けて書き加えたり、引用したり、複数の内容を関係付けたりしながら、調べた事実や書き手の考えなどが、読み手により分かりやすく伝わるように書くように求められている¹²⁾。

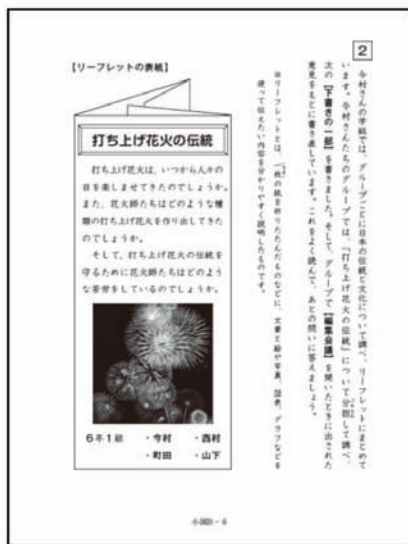


図2 調査問題の一部(リーフレットの編集)

この問題に対しての学習指導に当たっては、解説資料の中で、「自分の課題について調べ、意見を述べた文章や活動を報告する文章などを各自で編集したり、あるいはグループで共同して調べ、分担して持ち寄って内容を編集したりすることが重要である」とされている¹³⁾。グループで共同して調べることは、文部科学省の「学びのイノベーション事業」で挙げられる、情報通信技術が実現する新たな学びの中の、「子どもたちが教え合い学び合う協働学習」の理念と適合する¹⁴⁾。3～4人のグループによる協働学習を行う上で、現在最も有効であると考えられるのがタブレット型端末である。本研究ではアップル社のiPadを用いた。

4. 実践事例

PISA調査で調査をしている読解力が、単に声に出して読むのではなく、コミュニティに積極的に参加するための手段として読解力が求められているのであり、この能力は協働学習を行うことで高めていくことができると考える。

それを受けて設定されたと考えられる平成25年全国学力学習状況調査の小学校6年生B問題で出題された「グループで討論して内容を深めていく」という課題を達成するために、小学校4年生の国語科の単元「説明のしかたについて考えよう、アップとルーズで伝える」で実践を行った。

本単元では、写真と文章を対応させて読みながら、対比的な段落関係をつかみ、それを含んだ文章全体の構成をとらえることを行う。まずは、それぞれの写真を説明する段落を見つけさせ、段落同士が対比関係になっているだけでなく、段落の中でも対比が用いられていることに気付かせる。その上で、段落が文章全体の中でどのような役割を果たしているかを考えさせていく単元である。

また、本単元で扱う4年生の教材文「アップとルーズで伝える」は、分かりやすい説明とはどのようなものであるかを学ぶのに適した文章である。文章表現に意識を向けさせて、説明の仕方について考えさせたい。また、対比して述べることで、二つのものの違いがはっきりするという事は、自分が話したり、書いたりして何かを説明する際にも使えるという意識をもたせることができる。

本教材は、テレビの映像技法を中心に述べたものである。児童にメディアを通じて受け取っている情報が、一定の価値判断・意図に基づいて取捨選択されたものであることに気づかせ、相対化する視点を提供させるために、本実践では、教科書にある写真資料ではなく動画もアップとルーズの技法が使われていることや、説明していることと関連していることを押さえた。

本単元では、写真と文章を対応させて読みながら、対比的な段落関係をつかみ、それを含んだ文章全体の構成をとらえていく。学習の手引きには、そのための課題が設定されており、これらを通して児童は、筆者の説明の仕方の工夫を考えていくことになる。

筆者の説明の仕方の工夫を考えていく上では、その教材文ならではの特徴をつかむことが必要である。そのため、学習の手引きの冒頭で、本教材の特徴を述べ、その特徴に沿いながら読み進めていけるように課題が設定されている。また、「言葉」の課題も、説明の仕方について考えさせるものである。すべての課題が、「説明の仕方の工夫を考える」に向かうものとなっている。

なお、本単元は、次単元「仕事リーフレットを作ろう」と密接に関係する。それは、本単元で見つけた説明の仕方の工夫を生かして、次単元で書く活動を行うからである。実際に、児童がリーフレットを作る際にアップとルーズの技法や文章と写真・動画の対応を考えさせ、次単元の学習へとつなげた。

本実践では、朝日新聞社の協力をいただき「朝日新聞デジタル for school」を活用した。「朝日新聞デジタル for School」は、学校向けの記事やコラムを厳選して再編集しており、事件や事故などのストレートニュースの記事数は絞り込んで、楽しいイベントや微笑ましいエピソード等の記事が多い。本時の授業で扱うのは、iPadのデジタルコンテンツである。「朝日新聞for School」である。「朝日新聞for School」は、タブレット型端末で閲覧することを想定して作られており、iPadの画面サイズにも適切に表示される。小学校での学習においては、意見や提案の根拠となる資料を、検索エンジンで自由に調べるだけでなく、このような信頼度の高い児童用のメディアにあえて限定して取り組ませることも指導方略のひとつである¹⁵⁾。限定があることにより、学習者同士が必然性をもって共有することができ、言語活動がさらに充実する¹⁶⁾。



図3 動画情報を掲載した「朝日新聞デジタル for school」の画面

実践を始める前に、児童に意識調査を行った。以下は、その項目の一部である。

- 1 どんな国語の学習をしたいですか。
 - ・ICT機器を使う…14人
 - ・より多くの物語文を読む…5人
 - ・漢字を詳しく学習する…3人
 - ・音読をする…3人
 - ・読書を多くする…1人
 - ・会話の仕方や説明文を詳しく学習する…1人

意識調査1は、本単元の学習を進めるに当たって児童が意欲的に取り組むことができる学習方法を検討するために問うたものである。ICT機器を使った学習を行いたいと答えた児童は14人と約2分の1であった。国語科の授業では、50インチTVを活用して発表会を行うなど、発表の場面においてICT機器を活用する機会がある。また、前単元である「調べて報告しよう」では、図書室での調べ学習に加え、コンピュータを使用して調べ学習を行った。このことから、必要な情報を検索し、収集することは全員が行うことができている。情報モラルを合わせて指導することで必要な資料や情報を収集する際に、分析や選択を行い、検討・吟味する能力を身につけた児童が増えてきている。また、資料を提示するときには、ICT機器を積極的に活用している。今後も他教科の授業とも関連させ、情報活用能力を身につけることができるよう

に指導していきたい。

本単元の学習では、より一層の興味関心を持って学習に取り組むことができるように学校に配備されている大型TVやPCの他に文教大学と連携し、最先端情報端末タブレットであるiPadを9台導入した。3人班に1台使用し、児童がiPadを囲んで意見を出し合い、グループでの学びを深めることのできる協働学習を展開することにした。



図4 iPadを用いた協働学習

本実践における学習指導要領の位置づけは以下の通りである。

小学校学習指導要領解説国語編第3学年及び第4学年内容

「C読むこと」

(3) 目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。

平成10年の学習指導要領では、国語編において、第3学年及び第4学年の「A 話すこと・聞くこと」において、「身近な話題について、スピーチをすること、要点などをメモにとりながら聞くこと」とある。

現行の学習指導要領では、各学年における「B書くこと」の言語活動例として、第1学年および第2学年で「紹介したいことをメモにまとめたり、文章に書いたりすること」とある¹⁷⁾。今回の改定で、メモ活動が低学年から取り組む事項であることが示されている。そ

こで、授業で使用したワークシートには、気づいたことを適宜メモすることができるような構成にした。

本時の流れとして、教科書の「アップとルーズで伝える」を読み、筆者が伝えたいこと、説明の仕方を考えた。前時の授業では、紙新聞を用いてアップとルーズの使われ方とそのよさについて考えた。そこで、本時の授業では、デジタル新聞である朝日新聞for schoolを用いてデジタル新聞でもアップとルーズの技法が使われていることを確認した。iPadを使うことで意欲が高まり、また朝日新聞for schoolは児童に記事を選別する必要がなく、適した記事を限定して検索することができた。



図5 紙新聞とデジタル新聞の比較（同一記事）

グループでデジタル新聞と紙の新聞を比較しながらその特性を話し合い、操作に慣れたところで、教師側から「気になる記事」としてアップとルーズの技法が分かりやすく使われている動画を紹介した。文章だけでは分かりにくい部分も写真や動画を効果的に活用することでより見る人に訴えることができることを学んだ。

次にグループで記事の一つを選び、「アップとルーズのどちらが中心の使い方か」、「写真や映像資料の工夫点」、「資料と記事の関係」について、ワークシートに自由に書き出した。書き出しながらも気付いたことを適宜話し合いを行った。



図6 動画を見て気付いたことを伝え合い、ワークシートに記入

児童らが選んだ動画を含んだ記事は「モミジのライトアップ」「工場地震火災訓練」

「全日本大学駅伝」など様々であり、最後の発表では「動画と写真の両方を使っていて、より分かりやすい」「ルーズを多く使うことで、現場の様子をより分かりやすく説明している」などの意見が出された。授業の構成は、前時の紙新聞で行ったときと同じであるが、児童の反応が違いグループ活動もICT機器を介在させることで、前時の授業以上に反応がよくなった。実際に情報の説明や紹介のしかたに興味を持てたことで、次単元である「仕事リーフレットを作ろう」では、アップとルーズの技法と写真と文章を関連させたリーフレットを作ることができた。

表2 単元の評価規準と単元の指導計画
(単元の評価規準や学習活動に即した評価規準)

	ア 国語への関心・意欲・態度	エ 読む能力	オ 言語についての知識・理解・技能
単元の評価規準	<ul style="list-style-type: none"> ・目的に応じ、内容の中心を捉えたり段落相互の関係を考えたりしながら、本や文章を読もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・説明したり、必要な情報を得たりするなどの目的に応じて、中心となる語や文を捉えて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読んでいる。 ・内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読している。 ・文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指示語や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解している。
学習活動に即した評価規準	<ol style="list-style-type: none"> ①説明文の書き方に関心を持ち、進んでこれまでの学習を振り返って「アップとルーズで伝える」の説明の特徴を見つけようとしている。 ②本文から上手な説明のしかたを見つけようとしている。 ③説明的な文章を読んで感想をまとめたものを読み合い、互いの感じ方や考えのよさを認め合おうとしている。 	<ol style="list-style-type: none"> ①写真と文章を対応させる説明のしかたを読み取っている。 ②対比しながら述べる説明のしかたをとらえ、文章全体の構成と段落相互の関係を理解している。 ③中心となる語や文を捉え、事実と意見との関係などを考えて文章を読んでいる。 ④上手な説明のしかたをまとめている。 ⑤新聞、雑誌、デジタル新聞、映像資料などで「アップ」と「ルーズ」の使われ方を見つけ、説明するうえでのよさを考えている。 	<ol style="list-style-type: none"> ①指示語や接続語は、文相互の関係、段落相互の関係を端的に示す手がかりになることを理解し、文章を読んでいる。

表3 単元の評価規準と単元の指導計画
(指導と評価の計画 全8時間)

	主な学習活動	学習内容	評価規準・評価方法
1	<p>○これまでに学習してきた説明文の説明の仕方について振り返る。</p> <p>○全文を読み、筆者の説明の工夫に関心をもつとともに、「上手な説明の仕方を見つけよう」という学習課題を設定して、学習計画を立てる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">上手な説明の仕方について考えよう。</div>	○課題の設定の仕方	<p>アの①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表の様子や態度の観察 <p>アの③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表の様子や態度の観察 ・ノートの内容の考察
2	<p>○段落相互の関係を考えながら読み、文章の組み立てについて考える。</p> <p>○写真と文章の対応を考える。</p> <p>○第3段落と第1・2段落の関係を考える。</p>	<p>○組み立ての考え方</p> <p>○比較の仕方</p> <p>○関係の考え方</p>	<p>アの①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・態度の観察 <p>エの①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表の様子や態度の観察 ・ノートの内容の考察
3	○第4～6段落の関係をとらえる。	○関係のとらえ方	エの②
4	○第7・8段落を読み、その役割について考える。	○役割の考え方	<ul style="list-style-type: none"> ・ノートの内容の考察 <p>オの①</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表の様子観察
5	<p>○全文を読み返し、段落の内容を短くまとめ、文章全体を概観する。</p> <p>○各段落の文章全体に果たす役割について考える。</p>	<p>○要約の仕方</p> <p>○役割の考え方</p>	<p>エの③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノートの内容の考察
6	○全文を読み、筆者が用いている説明の工夫についてまとめる。	○工夫のまとめ方	<p>エの④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノートの内容の考察
7	○新聞、雑誌などで「アップ」と「ルーズ」の使われ方を見つけ、説明する上でのよさを調べ、報告し合う。	<p>○報告の仕方</p> <p>○メモの取り方</p> <p>○学習内容のまとめ方</p>	<p>エの⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノートの内容の考察 ・発言の内容の考察
8 本 時	<p>○デジタル新聞・映像資料における「アップ」と「ルーズ」の使われ方を見つけ、説明する上でよさを調べる。</p> <p>○学習を振り返り、まとめる。</p>		

■記事の名前

アップとルーズで伝える

グループ：

■中心となっている使い方は、どちらですか。

アップ

・

ルーズ

■資料の工夫点（使われている写真・映像にどんな工夫がありますか。）

■資料と記事の関係（使われている資料と文章はどのような関係ですか。）

■その他（他にどのようなことに気づきましたか。）

図7 授業で使用したワークシート

表4 本時の展開

学習活動	学習内容	・指導の創意工夫	時間
1 前時の学習内容を振り返り、本時の学習課題をつかむ。	○予想の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に行った紙新聞におけるアップとルーズの使われ方を確認する。 ・次単元「仕事リーフレットを作ろう」では、本単元で学習したアップとルーズの使い方や写真と文章の対応を用いることを伝え、本時の学習意欲を喚起する。 	5
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 0 auto; width: 80%;"> デジタル新聞のアップとルーズの使われ方を見つけ、そのよさを考えよう。 </div>			
2 グループに分かれて、デジタル新聞での「アップ」と「ルーズ」の使われ方、写真と文章の対応を調べる。 ・気付いたことを発表する。	○アップとルーズの使われ方 ○対応の見つけ方 ○対応の調べ方 ○話し合いの仕方 ○発表の仕方	<ul style="list-style-type: none"> ・グループに1台、iPadを配り操作方法を全体で確認してから取り組むことができるようにする。 ・紙の新聞と同じ内容の記事を比べて、デジタル新聞の特性に気付くようにする。 ・気付いたことをノートに書かせ、話し合うときの材料になるようにする。 ・iPadを操作しながら気付いたことを話し合い、意見を深めることができるように机間指導を通して支援する。 ・全体で発表するための準備として、どのように発表するかを考えさせるようにする。 	20

<p>3 1つの記事に着目し、アップとルーズの使われ方や、そのよさをグループで確認する。</p> <p>・確認したことを発表する。</p>	<p>○アップとルーズの使われ方</p> <p>○対応の見つけ方</p> <p>○対応の調べ方</p> <p>○話し合いの仕方</p> <p>○発表の仕方</p> <p>・写真や映像の効果的な提示の仕方</p> <p>・写真や映像と文章の対応の仕方</p>	<p>・着目の仕方の例を提示し、どのように確認すればよいのかを示す。</p> <p>・ワークシートの例を提示し、具体的な記入の仕方を示す。</p> <p>・発表する際には、気付いたことの根拠としてグループで使用したiPadを50インチTVに接続し、より具体的に発表することができるようにする。</p>	<p>15</p>
<p>4 単元の学習を振り返りまとめる。</p>	<p>○まとめの仕方</p>	<p>・次単元「仕事リーフレットを作ろう」では、本単元の学習で調べたことを生かすことができるようにする。</p>	<p>5</p>

5. 成果とまとめ

本実践を通して、児童が授業に対して意欲的になったことが授業後のアンケートより分かった。以下は、そのアンケートの一部である。

1. 朝日新聞デジタル for schoolについて
- ・アップとルーズの勉強を、紙の新聞よりも詳しく調べることができた。
 - ・デジタル新聞を使って、アップとルーズを体験できた。動画を見たり、調べたりするのができてうれしかった。
 - ・いろいろな記事を調べられたから楽しかった。
 - ・今までよりも、手軽に資料を探せたりしたので、よかったです。
 - ・普通では見られない動画や、種類別に分けられていた記事を探せて、アップとルーズがよく分かりました。
 - ・動画を見られたし、記事がたくさんあってよくわかった。
 - ・紙の新聞では、動かない動画や一週間前の新聞は見ることができないけれど、iPadのデジタル新聞ならば、動画や1週間前の新聞を映し出せる。動画などで、より本当のことが見られるので、よかったです。
 - ・動画の種類が多く、何度も見られてよかったです。
- 問2. 今までの授業と変わったことについて
- ・iPadが使えて勉強が楽しくなった。
 - ・操作が簡単。デジタルで勉強すると、わかりやすくなった。
 - ・iPadの授業はすごく楽しかった。
 - ・3人グループで協力してできた。
 - ・今までは、教科書だけでつまらなかったのに、iPadを使うと勉強が楽しくなったことです。
 - ・いつもの勉強と違うのがよかった。
 - ・今までは、テレビだけだったけれど、iPadを使って調べられるようになったこと。

児童の感想より、朝日新聞for schoolの特性である動画が印象に残っていること分かる。調べ学習を行う際に知的好奇心を刺激し、動画の構成について話し合うときにグループ全員で視聴することができた。また、記事検索が楽になることで、紙の新聞では行うことができない過去の記事を遡って閲覧することができ、実際に紙の新聞と比べることでニュー

スに関連するプロが撮影した動画により一層の興味を持たたと考えられる。

また、iPadを活用することで、それぞれのグループでの活動にメリハリが生まれ、楽しさの中に子どもたち同士の高まりを感じることができた。今回の実践以降も、この学級においてはタブレット型端末を用いた授業を行い、協働学習の機会を多く設けた。

全国学力学習状況調査の課題に対しては、実際のデジタル新聞に目的や意図に応じた編集としての工夫や文章との対応を学ぶことで、目的に応じて文章を編集する力がある程度身についた。また、グループでの協働学習を行うことで、相互啓発を図りながら目的や意図を明確にして共同して調べることができた。これにより次单元「仕事リーフレット」作りを通して課題の解決を図った。

今回の実践は、全国学力学習状況調査を受けて設定しているが、その効果の検証はすぐには不可能である。また、年度末に実施した業者学力調査では、昨年度と比較して偏差値が向上した児童が多かったがその関連は分からない。

しかし、児童の感想よりICTを活用した協働学習により学習への意欲が高まったことは、自己評価からも明らかである。全国学力調査の課題をICTを活用して様々なアプローチの方法を検討していきたい。

6. 今後の課題

全国学力テストは、文部科学省が求める学力へのメッセージだととらえたい。学力テストの問題を校種、教科にとらわれずICT活用を含めたデジタルの視点から再検討することで、今後の授業づくりのアイデア、特に教育ICTの有効な活用方法の開発に生かしたい。今後も最新の全国学力テストの検討を行い、資質・能力の育成に留意したICTを活用した授業づくりの実践と課題としたい。

謝辞

本研究の実践のために埼玉県越谷市立大沢小学校校長荒井一郎先生をはじめ、同校の先生方、朝日新聞デジタル営業センターの中森千智氏には多大なるご協力をいただきました。ここに改めて感謝の意を表します。

文献

- 1) 国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査～2012年調査国際結果の要約～」中央教育審議会， pp.1-30 (2013)
- 2) 日本経済新聞電子版「学力テスト結果，静岡知事が公表」
http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG0403P_U4A900C1CC1000/
(2014.9.20取得)
- 3) 文部科学省「平成25年度全国学力・学習状況調査報告書 小学校国語」 pp.2-8 (2013)
- 4) 文部科学省「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」(2012)
- 5) 今田晃一「iPadの教育活用一連載①協働学習につながるグループ学習に活用」，教育家庭新聞，2012年7月2日号
- 6) 同掲書3) pp.56-64
- 7) 国立教育政策研究所「生きるための知識と技能5 OECD生徒の学習到達度調査(PISA) 2012年調査国際結果報告書」明石書店p.53 (2013)
- 8) 同掲書7) p.66
- 9) 同掲書7) p.66-pp.68
- 10) 同掲書7) p.68-pp.69
- 11) 毎日新聞Web「国際学力テスト:日本の対策奏功」，毎日新聞，
<http://mainichi.jp/shimen/news/20140402ddm041100173000c.html>
(2014.9.20取得)
- 12), 13) 国立教育政策研究所 教育課程研究センター「平成25年度 全国学力・学習状況調査 解説資料」 pp.9-18(2012)
- 14) 今田晃一「教育におけるデジタルの可能性ー授業づくり及び学習指導上の留意点ー」，文教大学教育研究所紀要第22号， pp.75-84 (2013)
- 15) 今田晃一「教育におけるデジタルの可能性ー連載④『朝日デジタル for school』で動画と記事の関連を学ぶ」，教育家庭新聞，2013年8月5日号
- 16) 文部科学省「小学校学習指導要領国語編」，平成20年6月